

研究専攻（専門領域）		文化環境研究専攻（芸術論）		学籍番号	07CS016
氏名	西原 史子	ローマ字	NISHIHARA Fumiko	国籍 (留学生)	
修士学位論文名	台湾原住民族文化の博物館展示に見られる文化政策 —日本統治と原住民族アイデンティティ				
提出年月日	2009年1月13日		指導教員	井口 壽乃	
体裁 (論文)	35頁(1頁文字数1200字)		言語	日本語	
別冊添付資料等	巻末資料9頁				
キーワード	博物館 文化政策 台湾原住民族				
<p>現在、台湾原住民族は、全台湾人口の2%にも満たない少数民族であるが、その文化は台湾各地の博物館において目にすることができる。</p> <p>本研究は、「博物館展示」というテーマに基づいて、日本統治時代から現代に至るまでの台湾の文化政策について考察し、その中で台湾原住民族の文化はどのような位置付けにあったのかを明らかにすることを目的としている。</p> <p>本論文は、次の5章から構成される。まず、第1章で台湾原住民族の概要について述べる。次に、第2章では、19世紀後半から20世紀前半にかけての博覧会で盛んに行われた植民地展示について考察する。具体的には、「第五回内国勸業博覧会」「日英博覧会」「拓殖博覧会」「明治記念拓殖博覧会」「台湾勸業共進会」の5つの博覧会に見られる台湾原住民族文化の表象を対象としている。続いて第3章では、台湾初の博物館である「台湾総督府博物館」及び台湾初の大学である「台北帝国大学」内に設置された「土俗人種学講座標本室」を取り上げ、日本統治時代(1895～1945年)の博物館政策について論じる。第4章では、第2次世界大戦後から1970年代半ばまでの博物館政策について述べ、最後に、第5章で1970年代後半以降の文化政策や原住民族運動と原住民族文化の展示との関係性について論じる。本論文の副題は「日本統治と原住民族アイデンティティ」となっているが、前半の「日本統治」に対応するのが、第2章及び第3章、後半の「原住民族アイデンティティ」に対応するのが第5章である。</p> <p>以上の考察を通して、次のような結論が得られた。すなわち、日本統治期においては、台湾原住民族の文化を博覧会や博物館で展示することは、日本が国内外に向けて、「帝国」としてのナショナル・アイデンティティを主張するための手段であった。戦後から1970年代半ばまでの時期には、中国文化すなわち漢族文化を復興させることが目標とされたため、文化政策の中で台湾原住民族文化が重要視されることはなかった。しかし、1970年代後半からは、原住民族文化が地方文化の特色と考えられるようになり、さらに1980年代半ばからの原住民族運動によって、ますます原住民族文化に目が向けられるようになった。そして、台湾の民主化以降は、原住民族文化は台湾の発展のための重要な資源として認識されるようになるのである。</p> <p>今後の課題としては、原住民族と同じくアイデンティティを主張する運動を展開した客家の文化は、台湾の文化政策の中でどのように扱われてきたのかを考察することや、博物館や博覧会での展示を行った側からだけでなく、展示を見た側からの研究も合わせて行うことなどがあげられる。</p>					